

日本ビオトープ管理士会 平成 24 年度 第 3 回研修会

野鳥とともに暮らす街づくりを考える

オオタカが繁殖する万博記念公園の事例を参考に

日 時： 平成 24 年 12 月 2 日（日） 10:00~16:00

場 所： 日本万国博覧会記念公園（大阪府吹田市）

参加者： 77 名 （申込総数：91 名）

主 催： 日本ビオトープ管理士会 近畿支部
（独）日本万国博覧会記念機構
日本野鳥の会 大阪支部

共 催： 日本ビオトープ管理士会



《第 1 部》 「バードウォッチング」 （10:00~12:00）



■目的： 都市内のビオトープの“大拠点”である万博公園における野鳥の生息状況を探る

■案内： 日本野鳥の会 大阪支部 平 軍二氏 ほか リーダー 8 名

■概要： 万博公園「自然文化園」において、次のコースを歩きながらバードウォッチング

【コース】

- 自然観察学習館 ⇒ どんぐり池 ⇒ けやきの丘 ⇒ 水の広場 ⇒ 水すましの池
⇒ 西大路 ⇒ 上津道 ⇒ ビオトープの池 ⇒ もみの池 ⇒ 自然観察学習館

【観察した野鳥】

- 「アトリ」「マヒワ」「シメ」「カウラヒワ」のアトリ科 4 種、「ピンズイ」も加わったセキレイ科 4 種など、計 29 種



↓ アキニレの実を食べるアトリ科の野鳥を観察



↑ 「マヒワ」の群れを発見





■目的： 2012年の万博公園における「オオタカ」の繁殖活動等を映像で紹介

■概要：

※ 司会：池口直樹氏（ピオトープ管理士会）

(1) オオタカ繁殖記録 2012 《報告者：廣瀬達也氏 万博公園オオタカ生息環境保全委員》

◆2012年の万博公園における「オオタカ」の繁殖行動を、**ビデオ映像**により紹介

- ① 造巢・抱卵編
- ② 孵化・育雛編
- ③ 巣立ち編



◇3羽のヒナが誕生し、親の愛情を受けながら育っていく様子や、巣立ち、そして旅立っていくまでの4ヶ月以上に渡るドキュメント映像を、撮影者の廣瀬氏に解説して頂きながら鑑賞しました。

◇1羽の幼鳥がハシブトガラスの成鳥に襲いかかったものの、25分にも及ぶ死闘の末に逃げられてしまった様子など、非常に興味深い映像の連続でした。



(2) 万博公園等での野鳥の子育て 《報告者：有賀憲介氏 万博公園オオタカ生息環境保全委員》

◆万博公園やその周辺における「オオタカ」を始めとする野鳥の育雛の様子を、**写真と解説**により紹介

- ① 繁殖期のオオタカ
- ② 野鳥たちの子育て



親から餌をもらうオオタカのヒナ



スズメを捕獲したオオタカ（父親）



ウシガエルを食べるオオタカ幼鳥



← 餌をねだるセグロセキレイの幼鳥

↓ 餌をねだるカワラヒワの幼鳥





- 目的： 万博に生息する豊かな生物相を周辺地域へと広げ、「野鳥とともに暮らす街づくり」を目指すことについて、パネルディスカッション形式で考える

■概要：

《パネリスト》

- 平 軍二氏 (日本野鳥の会 評議員、万博公園オオタカ生息環境保全委員)
戸田 耿介氏 (日本生態系協会 評議員、こども環境活動支援協会監事)
稲波 誠氏 (万博公園オオタカ生息環境保全委員)
廣瀬 達也氏 (万博公園オオタカ生息環境保全委員)
有賀 憲介氏 (万博公園オオタカ生息環境保全委員)
高畠 耕一郎氏 (すいた市民環境会議 副会長、大阪自然環境保全協会 理事)
宮本 好彦氏 (日本ビオトープ管理士会 近畿支部 副支部長)
千原 裕氏 (日本万国博覧会記念機構)

《コーディネーター》

- 池口 直樹氏 (日本ビオトープ管理士会 近畿支部長)



■進め方

- ◆第2部の映像解説を含めた「オオタカ」に関する質疑、続いて「野鳥」全般についての質疑、最後に「野鳥と暮らす街づくり」に関しての意見交換、という順で進めていきたい。

■第2部の映像を見ての感想は？

- ◆貴重な映像であり、普通では見ることのできないような感動的なシーンも多くあった。撮影に当たっては相当な苦労があったことと思う。
- ◆今後のオオタカとの共存のあり方を考えて行く上で、貴重な資料になると思う。
- ◆テレビのドキュメント番組に匹敵するような内容であり、子どもたちにこの映像を見せてあげれば、非常に関心を持つのでは無いかと思う。
- ◆抱卵から巣立ち、旅立ちまでを追った一連の映像を見るのは初めてである。3羽が巣立ったということは、餌が豊富にあったのだと思われる。猛禽類の観察、記録は非常に困難である中、極めて貴重な資料となろう。調査の継続を期待する。
- ◆日本野鳥の会大阪支部では、2000年頃の大阪でのオオタカ生息状況を調査し、50ほどの営巣地が見つかったものの、当時は万博公園での生息は記録されなかった。大規模開発地等の影響で生息地を失ったオオタカが、山麓部から都市部へ流れてきているのではないかと考えている。減っているところ、増えているところがあり、トータルとしては2000年頃より減っているようだ。

◆何故、万博公園で連続しての営巣が行われるのだろうか、理由の一つは万博が自然に近い公園になりつつあるということであり、もう一つは、近辺の生息地が減ってきたということだと考えている。

今後も調査を続けていくが、オオタカへの悪影響を避けることを念頭に置くことが大切。

◆一昨年の雄は鉄塔をよく利用していたが、今年の雄はあまり利用していない。
個体間に差（個性）があるようなので、その当たりも観ていきたいと考えている。

■万博公園に住んでいるオオタカはどのようなものを食べているのだろうか？

◆スズメ、ヒヨドリ、キジバト、カラス、珍しいところではゴイサギなど。
スズメ、ヒヨドリは全部食べてしまうので痕跡が残らないが、今回の映像で確認していただけたと思う。幼鳥がウシガエルを食べている姿も記録された。

■餌はどのくらいの範囲で捕獲しているのだろうか？

◆ヒナに腹を空かせてはならないので、繁殖期間中は巣の近くの場合が多く、万博公園内での捕獲が多いと考えている。

■オオタカの子育ての際の雄雌の役割分担は？

◆雌は巣でヒナを守る役割があるので、体は雄より大きい。
一方、雄は効率よく餌を捕獲できるように小回りのきく小型となっている。
ヒナが成長してくれば雌も餌を獲りに出かけ、獲物を直接巣に持ち込むケースも見られる。

■オオタカとカラスはどちらが強いのだろうか？

◆一対一ではオオタカの方に軍配が上がるだろう。
映像で互角に戦っていたのは「今年生まれのオオタカ幼鳥 vs ハシブトガラス成鳥」だった。

■旅立った（万博公園から飛び去った）幼鳥はどこまで行くのだろうか？

◆別箇所の調査では、500 kmくらい移動した個体もあるというが、生まれた周辺に餌が豊富にあれば、あまり遠くに行かないケースもあるようだ。
◆交野市の「ほしだ園地」では「ハヤブサ」が毎年子育てしているが、いずれかの親鳥が怪我をして死んでしまったりすると、一週間もしないうちに新しいペアができる。
ということは、結構近くに別個体が生息しているものと推測できる。

■旅立った後に万博公園内で撮影された若鳥はどこから来たのだろうか？

◆昨年生まれの個体と思われるが、万博公園では昨年は抱卵途中での営巣放棄で繁殖していないことから、別箇所で誕生した個体の可能性が高い。
今年生まれの幼鳥が旅立ったすぐ後に若鳥が観察されたことから、案外近くに別個体が生息しているのだろう。

■万国博覧会開催後の40年で、生息する野鳥の姿に変化があったのだろうか？

- ◆1985年から、(日本野鳥の会大阪支部では)万博公園で「定例探鳥会」を開催している。最初の頃は、草原の鳥である「キジ」がたくさんいた。1日の探鳥会でキジの声を50回も聞いたことがあったのだが、1998年以降は姿だけでなく声も全く確認できなくなった。今年、たまたま一度だけ姿を観察することができたのだが。
- ◆(パピリオン等を撤去した)更地に植樹した当初は草原も多く、コジュケイ、モズ、ホオジロ、ヒバリなどが繁殖していた。その後、最初の頃の探鳥会ではまったく確認できなかった「ヤマガラ」が増えてきた。今のように森が育った結果、樹林性の野鳥が増え、逆に草原性の野鳥は減少した。万博公園の森の変遷が、生息する野鳥にも影響したということ。昆虫なども同様であろう。

■万博公園の森の現状に、何か問題点はあるのだろうか？

- ◆森が成長した結果、暗いところが増え、それに伴い、生物種も減っているように感じる。若い森では、このようなことは普通であり、やがていろいろな理由で倒木が発生し、多様な環境ができていくのだが、ここでは近辺の森が開発されるなどの状況もあり、ゆったりと自然の推移に任せっきりにするのではなく、ある程度多様な環境作りに手をかけていく必要性も感じている。
- ◆具体的には、間伐を行ったりして多様な環境をモザイク的に配置して、生物多様性の向上に努めていきたいと考えており、今年度、早期緑化の役割を終えたギンドロを伐って湿地環境を創出する計画を進めているところである。
- ◆生物多様性の向上にとっては、必ずしも森が大きくなればよいというわけではなく、多様な環境を用意することもある程度は必要だということだろう。

■オオタカは里山の鳥と言うが、万博公園が里山的になってきたのだろうか？

- ◆本来の「里山」の環境が生息に適さなくなってくれば、万博公園のように良好な樹林地があり、多くの獲物が生息しているようなところでは、オオタカの営巢も期待できるということであろう。

■万博公園内と周辺の野鳥相の違いはあるのだろうか？

- ◆万博公園は樹林が主体であり、池はあるがカモ類は少ない。一方、周辺の地域には樹林が少ないものの、川や池に行けばカモ類が多いなど鳥相は変わる。
- ◆万博公園の中に多様な環境を作って生物多様性を高めていく、という話があったが、そのような取り組みも大切であると思っている。

■万博公園に生息している野鳥を周辺に広げていける可能性は？

- ◆万博公園の樹林や草地を「大拠点」として、それを周辺に広げていくためには、児童公園や住宅地の庭とか、街路樹、河川、そのような生きものが繁殖できる場所をつないでいく、工

コロジカルネットワーク（ピオトープネットワーク）の形成で、生きものの繁殖、移動できる場所を広げていく取り組みが大切だと考えている。

そのためにも、市民の意識と努力、行政の施策、そのようなものの連携が大事であろう。

- ◆緑地を作る場合でも、緑の「質」の視点が大切で、生きものの生息に適した材料などを採用して欲しい。
- ◆行政に求められていることは自然環境の保全、人間が人間らしく生きていくための基盤を整備することではないかと思っており、南港野鳥園の存続を切に期待している。
- ◆緑を増やすことの大切さはわかっているが、これからは「質」の問題を重視する姿勢が大切。万博公園の森も、当初は量も質も低レベルであったであろうが、今やいずれの面でもレベルが高くなってきているように思う。
街の中にこのような公園を作ることはあまり期待できないので、最初からある程度「質」に配慮した作り方、今あるものを育てていくという取り組みが大切。
- ◆具体的に言うと、人間にとっての“見た目”や安全を重視する都市公園の緑地はあまり期待できない。街路樹の剪定がその例であり、どこも同様の切り方をしているが、場所によっては樹形を考慮した手法の採用もできるだろうし、大木を育てるところがあってもいい。
生きものが生活できる「間隙」が大事であり、ある程度意図的に作ってやる必要もあろう。
- ◆もう一点、私は周囲を農地に囲まれた田舎に住んでいるが、野鳥は少ない。
都会にも住んでいたが、むしろ田舎ほど野鳥が少ない。
少ない理由は餌がないこと、つまり虫が少ないことであろう。
引っ越したときに網戸が必要だと思って付けたが、ほとんど必要のない状況である。
蚊も少ない。農薬の使用も影響しているのだろう。
- ◆今は農地の多い田舎よりも、都市の周辺緑地の方が生きものにとっては住みやすい環境だと言えるのかも知れない。
そのような事実からも、「野鳥とともに暮らす街づくり」の実現可能性は高いものであると考えている。
- ◆樹林だけでなく、虫を育む草地の存在が重要。
大阪市街地のビルの屋上で生きもの調査を行った。そこは当初、芝生地だったが、草を刈らずに雑草地にしてもらったところ、直ぐにバッタが住み着いた。
そんなところでも、ある程度草丈が有り、バッタの食草を生やせば、やってきてくれる。
- ◆街中で樹林地を作ることが難しくても、草地や水辺など、生きものを呼ぶ手法はいろいろあり、その結果、虫が増えれば野鳥もやって来る可能性が高い。
人それぞれ考え方は異なるので、必ずしも街中に野鳥がいる必要は無いと思われる方もいるかも知れないが…

■皆様の「野鳥と暮らす街」のイメージは？

- ◆朝、目覚めると小鳥のさえずりが聞こえる、空を見上げると野鳥が飛んでいる…
庭に小さな水浴び場や砂浴び場を用意すると、野鳥が姿を見せる…。
- ◆子どもたちの情操教育なりを考えると、身近なところに野生の生きものが棲んでいる意義は非常に高いものがあると考えている。

- ◆人間の生活空間の中で、生きものと触れあえることは大切。そんな街になれば良いと思う。
 - ◆気持ちが一番大事。餌付けするということではなく、バランスのとれた感性で生きものと接していただければ、きっと生きものとの共存も実現するであろうと考えている。
 - ◆「野鳥とともに暮らす街づくり」、言葉はきれいだが、実際にどれくらいの人がこのような街を望んでいるのかは疑問である。
鳥を呼ぶためには、毛虫が発生しても一定我慢しなければならないのだから。
 - ◆今の世の中は“除菌”に熱心だが、我々の体にはいろんな細菌が同居している。
我々はいろいろな生きものに囲まれて生きているからこそ、健康に暮らせるのだと言うことを理解しなければならないだろう。そんな価値観を皆が持たなければならない。
 - ◆中学に上がるまでは別に平気であっても、虫を見れば「キヤー」と言うのが普通だと考えてしまうところがあるのではないだろうか。
 - ◆野鳥を都会で増やすことは基本的には難しいと考える。
やはりまずは「虫」を増やさなくてはならない。しかし実際、虫の嫌いな人は非常に多い。1匹の虫が教室に入ってきただけで授業ができなくなる。生徒は騒いで混乱する。別に普通の虫であっても。
それほど子どもたちは敏感、家でも同様ではないのだろうか。
 - ◆虫が歩いているような家は、とんでもない家だと考えているのだろう。
子どもの頃、郊外の街に住んでいた。田んぼも多かったが、夜になると電灯は虫でいっぱいだった。でも、今、都会の街灯に虫が集まっているだろうか。
 - ◆食物連鎖を考慮すると、野鳥を呼ぶためには虫が、そして虫の食べる雑草が必要である。
単純にきれいなものだけを身近に呼ぼうと思っても、それには無理がある。
虫がいて当たり前の環境を作っていくことが大切ではないだろうか。
 - ◆万博公園には、虫がたくさんいるから行くのが嫌だという子がいる。
そのような子どもへの啓発ということがすごく大事なことだと感じている。
 - ◆本当のものを残していくためには、きれいなものだけに目を向けては駄目。
 - ◆「万博公園における生態系の変遷」というパネルがそこ（自然観察学習館内）にかけられているが、是非ご覧になっていただきたい。
「生物多様性の豊かな街」というのは、この図のように、多くの生きものがつながり、関わり合って生きている場所なのだとすることを多くの方に是非知っていただきたい。
- ◇毛虫は嫌だけれど野鳥は身近にいて欲しい、このような考えは生態系を正しく理解していない現れであること、多種多様な生きものたちが関わり合って生きていくことのできる環境こそが「ほんもの」の自然であり、そこには多様な野鳥の姿も期待できること、等を改めて認識させられたところである。
- ◇このようなことを踏まえながらも、この万博公園で育まれている多くの野生の命を、周辺の街へと広げていく、そして同時に人々の生きものへの理解が進み、やがては身近に虫や野鳥が普通に暮らしているのが実現している、このような将来像に思いを馳せながら、このシンポジウムをお開きとさせていただきます。

第3部の会場の様子

